



『^{あく}悪^なを作^すな ^{ぜん}善^{ぎょう}を行^せよ』

先月号では善・悪について極端な例と禅者の面白みを紹介したが、そもそも仏教はどう説くか。

仏教にはお釈迦様以前の7人の仏が説いた共通の戒めがある。

- ・^{しよあくまくさ}諸悪莫作（もろもろの悪を作すこと莫く）
- ・^{しゆぜんぶぎよう}衆善奉行（もろもろの善を行い）
- ・^{じじようごい}自浄其意（自ら其の意を浄くす）
- ・^{ぜしよぶつきよう}是諸仏教（これ諸仏の教えなり）

^{はくらくてん}白楽天は禅を求め、樹上で仙人のように暮らす^{どうりん}道林和尚を訪ねた。早速「仏教の根本の教えとは何か」と質問した。和尚は即座に「諸悪莫作、衆善奉行」と答えた。平凡な答えに呆れた^{あき}白楽天は「そんなことは三つ児でも知っている。」と反発するが、「三歳の童子でも知っているも、八十の老人でさえ行うことは難し」と一喝された。それ以来、和尚を師と仰いだというが、「悪」の出所はどこか、^{しん}身・^く口・^い意の^{さんごう}三業から生まれる「十悪」を見てみよう。

- ^{せつしやう}身による悪＝・^{うば}殺生（生命を奪う）・^{ちゆうとう}偷盗（物を盗む）・^{じやいん}邪淫（淫らな性）
- ^{あつく}口による悪＝・^{ちゆうしやう}悪口（中傷）・^{りやうぜつ}両舌（二枚舌）・^{にまいじた}綺語（無意味な発言）・^{きご}妄語（嘘言）
- ^{こころ}意による悪＝・^{けんどん}慳貪（貪り）・^{むさぼ}瞋恚（怒り）・^{しんい}愚癡（癡かさ）

さて「諸悪莫作」には三段階があると言われる。つまり「もろもろの悪をなすことなかれ」は、戒律の禁止事項であるが、自戒を深めるうちに「もろもろの悪をなすことなし」と、悪から距離が生まれ、無汚染となる。さらには、「すでに悪の^{にお}匂いすらなし」と、悪の観念を忘るようになり、^{いっきよしゆいっとうそく}一挙手一投足が他のための善行となる。そう、赤児のように。そうなれば、先月号で紹介した^{せんがい}仙厓・^{はくいん}白隠・一休・良寛の禅境も味わうことができよう。

「十王経」にみる私たちの死後のスケジュール (その3)

死出の山は長さが800里、高さは不明ながらもとても険峻な山脈であり、これを七日間にわたって、星の光だけを頼りに死者はとぼとぼと一人で歩いていくことになるそうです。死者はこの冥途の旅の間、中陰の期間はどのような姿をしているのでしょうか？死者はきわめて微細な体となり、人間の目には見えません。そして香りを食物としているため、仏壇には彼らのために線香を絶やし



てはならないという宗慣が生まれました。死者はこうして死出の山をスタートし、山路をとぼとぼと歩いていくうちに、七日間が過ぎます。そして、来世の行き先を裁く**最初の裁判官・秦広王**の法廷（第一法廷）に立たされることになるのです。その後、七日目ごとに七回の裁きを受けることとなります。

死者は秦広王の法廷を過ぎると、あの有名な**三途の川**にさしかかります。（三途の川と脱衣婆さんの記事は8月号を参照）この「三途の川」の渡し賃は六文といわれていて、お棺の中に一文銭を六枚入れる風習が生まれたのもこのため、「地獄の沙汰も金次第」のようです。

あたりを見回すと**賽の河原**が見えます。そこでは大勢の子供たちが一生懸命、河原の小石を積んで塔をつくって



ます。ところが冥途の鬼がやってきて、その塔をこわしてしまいます。子ども達は恐ろしさのあまり、泣きながら逃げまどいます。すると地蔵菩薩が現れて、子供たちはその衣の陰にかくれます。お地蔵さまは鬼を成敗することはないません。子供たちに勇気を与えて、また功德の塔を積みさせるのです。次号では第二法廷以降を駆け足でご紹介します。